千石英世

白鳥の詩

書肆半夜灯

特58
757

緒言

晩唐の詩は晩春の景に似て、花燭爛熳、人をして轉た恍惚たらしむるの趣あり。爲めに後世の詩人をして、唯浮華にして情致に乏しと云はしむるもの、まことに故なきにあらざるなり。

然りと雖、花を觀る、必ずしも、新蕾わづかに綻びて曉露濕かなるの時のみを云ふべからず。千條萬朶紅紫

明治
27 9 7
内交

歴亂、輕風時に到りて落花斜嗶に舞ふの夕、また神韻の縹緲たるものなからんや。彼の繪事に見るも、枯淡の墨畫絢爛の彩畫、何れも特色あるを知らば。獨り詩に於て、精彩赫奕たるものを願みざるの愚を學ぶを要せんや。蓋し漢詩に遊ぶもの、僻見なり。

白氏の詩は晩春景中の櫻花なり、而かも濃艶比なきの八重櫻か。彼れ弱冠詩稿を懐にして京に入り、願況に謁してこれを示す。願況その名を見、未だその詩を見ずして曰く、長安米價貴し居大に易からずと。已にしてその詩を見、「離々原上草。一歳一枯榮。野火燒不盡。春風吹又生」に至るに迨んで、即ち驚嘆して曰く、斯くの如きの句を作り得ば、居易だ難からずと。彼れが天禀の詩才は、已に此時に於て、時の老大家をして自

失せしむるの域に達し居たりしなり。その成熟するに及んで、咳唾珠を爲し、筆筆神に入り、晩唐詩人のうちにありて更に異彩を放つもの、實に謂れなきにあらざるなり。

彼れが詩文の、我文學の發達に資すること極めて多かりしは、茲に叙説するを要せざるべし。而してその當時に於ては、彼れが思想の一半は、直ちに我文士の思想の一半を形づくりたるものなりしと云ふも、敢て誣言にあらざるなり。

今や新體詩作に從事するもの尠からず、而して多くその範を西歐の詩に採らんとす。余豈また大にこれを歟ばざるものにあらず、而かも此間に於て、全然漢詩の趣味を顧みざらんとするものあるを憂へざるを得ざるなり。

此頃白氏の詩數篇を譯せし

を以て、之を世に問はんと欲す、必ずしも今日の新體詩界に資するところあるべきを期するにあらず。

原詩の金玉之を鑄て瓦礫となす、罪應さに輕からざるべし、而かも直ちに原詩を讀むの煩を厭ふの諸子にして、一たび之に手を觸るゝを得ば幸甚なり。

譯者誌

白氏の詩

目次

○短歌行……一頁
○琵琶行……三頁
○長恨歌……四頁
○浩歌行……二十一頁
○聞蟲……二十五頁
○賦得古原草送別……二十六頁
○舟中讀元九詩……二十六頁
○贈江客……二十七頁
○別草堂……二十八頁
○村夜……二十九頁
○玉昭君……三十頁
○秋思……三十頁
○琵琶行……三十二頁
○和微之雨中花……四十五頁

白氏の詩

短歌行

永久に消えざる白熱の
火色まとゝもく昇る日の
行くや天上三千里
下界はとづか一刻の
出てはひるの光充ち
入りては夜の烏羽玉の
くるり〳〵と際限なく
止めもあへず廻るかな

止めあへずは如何せん
杯とりて君がため
短歌うたとん歌のふし
詞の玄らべかなしくも
聞けや少年よく聞けや

『今宵もいまだ終らぬに
とや迫り來る明日の夜
嘲りやまぬ秋風の
うしろに笑ふ春の風
人は地ゐつく根もあらず
時はつれなく過き行きて
玄ばしかゝやく紅顔は
夕日とゝもに落るなり
されば笑へ且や飲め
強いて笑ひて飲めや君
人生いかで何時までも
樂しかるべき日のあらん
己かきは僅か束の間の
短かきふしを重ねつゝ
やがては老の襲ひ來ん』

○

燕子樓

月皎々と檐を照り

霜凜々くと簀戸に充つ
かたしく衣冷やかに
燈火青く消え殘る
憂き世の秋の夜を君が
ひとりの爲に長しとや

○

長恨歌

何時ふやあらん唐土の
ある皇色を愛でたまひ
ほまねくさがす傾國の
うたてや年を經ぬるまゝ
影だもさらに見えざりき

楊家のむすめ奥深く
人目をよきて育ちしが
天の生みあすあてやかさ
地ゐ棄置かん花あらず
忽ち皇に召れつゝ
玉體近く侍りけり

涼しきまなこ眸かへしつ
一たび笑めは千々の媚
さしもに廣き六宮の
紅白粉のいろもなし

風なほ寒きとるのそら
華清にもあみ賜とりて
温泉の水のなめらかに
雪のとだへを洗ひつゝ
童女の肩をちからにて
たつ姫百合の花一輪
露やおもしと惱むらん

かくてぞ皇が恩澤の
あらたなりける始なり
雲のかつらにとなの顔
金歩もらりと翠帳に

嬪娥のすがた鎖しては
臘なりけり春の夜を
皇みじかしと嘆ちつゝ
日影うつりて尚起きず
朝政つねにおくれけり

皇がおもひの淺からず
夜ごとならぶる伽羅枕
四季のあそびに從ひて
いとまもあらぬ身の幸よ
世にも稀なる後宮の
三千人のたおや女の
寵をひとりに集めつゝ

黄金のうてな玉の宮
うたげに夜を更しては
めめあたゝかき微醺
とらからいづれ國々の
領主となりて一門の
榮へいみじく見へけれは
世の父母はこゝろから
生まば女の兒と羨みぬ
高くそびゆる驪山宮
風のまに〳〵仙樂の
雲間をもれて聞ゆなり

歌おもしろく舞妙に
皇がひねもす御覽とす
折しもおこる陣太鼓
漁陽の天地うごかして
あとれ霓裳羽衣の曲
とゝろく音に破られぬ
九重ふかき城闕は
いくさの塵に埋もれて
皇を擁する千萬騎
花の都を落ちのびて
急ぐや西のそら百里

禍の根と遠やまの
黛のみどおもひしか
六軍たちまち駐まりて
一陣のかぜ海柴の
花ふきちらし鳳輦は
わづかに此處を進み行く

こがね白かね玳瑁の
櫛笄は地に塗みれ
誰かは拾ひおさむべき
すくひの詔も出し得で
うち蔽ひたる皇が面
愁にとざす眉おもぐ

血しほの涙目に滿ちぬ

空をかけ行く雲の色
地を吹き荒むかぜの音
棧高く上りつゝ
入るやしづ〳〵劔閣に
寂しき峨眉の山のすそ
日色くらく錦繡の
旗さしものも光なし

水はみどりに山青き
巴蜀のおくの行宮に
朝な夕なのものおもひ

檜端をてらす月のかげ
夜風にむせぶ笛のこえ
いづれ腸たえぬべき

天地めぐりて世は春の
やすけき御代と今ぞなる
燃輅かへすみちすがら
此處に來りて躊躇ひつ
馬蒐のつゝみ見下すや
摧けし玉のかんばせは
また見る由も亡き骸を
埋めし土の時經しが
ありし昔しのまゝの色

君臣たがひに見返りて
涙をしぼるそでたもと
やがて轡をひきしめて
駒のかしらをひんがしに
都路さしていそぎける

今も昔にかゝらざる
未央のやなぎ太液の
芙蓉の色香あざやかに
柳の眉に花の顔
想ひ回へせばなか〳〵に
涙のたねとならずやは

風あたゝかにとな開く
春の夕やあめさむく
木の葉かつ散る秋の悲

南の苑西の宮
草おひ茂り玉とし
落葉拂はずつもりつゝ
梨園の弟子も雨鬢に
霜をいたゝき局もる
上臈のいろも衰へ

垣根にすだく虫の音の
千々に碎けてもの思ふ

秋の長夜のともし火を
かゝげ〳〵てかう〳〵と
時うつ鐘を聞きつくし
星落々とひんがしの
空白むまで寐もやらず
鴛鴦の瓦に霜おきて
あかつき寒き獨寐の
翡翠の襖ひやゝけき

生死の別れいう〳〵と
はや幾年か經ぬらじも
魂魄たへてゆめにだも
相見ぬことの悲しさよ

不思議なるかな臨邛に
精誠もつてこんをくを
招く道士の在とし
皇がおもひに感じつゝ
方士を四方に遣として
隈なく尋ね覓めしむ

飛電の如く氣に乗りて
上碧落をきはめつゝ
下地に入りていと深く
黄泉を穿ちたどりしが
何處に影も見へざりき

あとれ奇くも聞つるよ
海原遠くひんがしの
虚無縹緲のそのなかに
仙山ありて樓閣は
五彩の雲にそびえつゝ
仙子數多にすめるうち
花のかんばせ雪のはだ
尋ぬる人のおもかげに
まがふかたなき人ありと

黄金の門を過ぎ行きて
玉の戸ぼそを訪なへば

皇が使ときゝつけて
夢おどろかし翠帳に
枕を推してきぬを攬り
起てば銀屏うちひらき
ねざめの鬢の雲みだれ
かたむく花冠整へず
玉のきざはし下り來る

風ふきかへす仙袂の
似るや霓裳羽衣の舞
さはれ芙蓉のかんばせは
涙のあめに悄れつゝ
堪へざる思ひ皇に謝す

『別れし日より我皇の
面かげ終に見まつらず
昭陽殿裏恩愛の
絶えて蓬萊宮中に
日月ながく過ぎぬらん
頭回へして下のかた
人の世遥か見おろせば
長安見えず紅塵の
霧たち籠るうたてさよ

今はむかしの品とりて
深き思ひをあらとさん

黄金の釵しろかねの
笄もちてかへりてよ
いづれ二つに擘きて
半と此處にとゞめなん
心しかたくたもちなば
天上人間べだつとも
相見る時のなからずや

長生殿のほしまつり
人なき夜半の語らひに
天にてあらば願とくば
比翼の鳥とうまれなん
地にてありなば願とくば
連理の枝となるべしと
契りしことば皇知らん
天地といかに長くとも
何時かは盡る時あらん
たゞ此の恨綿々と
絶やる時しもあるべきや』

○

浩歌行

天つみ空やあらがねの
地とこしへに限りなく
昨日に今日にまた明日
鬢に白髪の涙よせて

疎なりけり齒の杭
うたてき年の流れかな

覺えず過ぎし五十年
我面かげをてらしつゝ
心おどろくますかゞみ
世に白日をつなぐなと
人に朱顏をとどむべき
藥なきこそ是非なけれ

朱顏日ごとに衰えて
何時か靑史に名を垂れん
暫時年少ひきとめて

富貴來るをまたまくも
富貴來らず年少は
つれなく人を捨て去る

去るや流るゝ河に似て
うしろに回へす波もなし
賢愚貴賤のわかちなく
同じく歸する北邙の
おくつき高く並びつゝ
暗の戸とゝに鎖すなり

われのみ獨り斯やある
昔もいまもおしなべて

凡ての人のさだめなり
我年いまだつきずして
天の美祿とかめにあり
飲みて歌はん醉たかく

伯夷とうえて顏回は
いのち短かく終りたり
われと是等に較べなば
今はなか〳〵幸おほし
功名富貴は命なれや
命來らずばいかにせん

○

聞蟲

垣根にすだくむしの聲
長夜の恨つきせじな
雨となり行く大そらの
一しほ陰にこもるかな

憂になやめる人しばし
かりねの夢を結びなば
臥床近くにせまり來て
いよ〳〵哀れにすだくらん

○

賦得古原草送別

むら〳〵茂る野邊の草
枯れてと榮ゆ年ごとに
野火は燒けども根絶せず
春風吹けばまた萌ゆる
句古道をおかしては
翠城墟につゝくか那
また王孫をおくりつゝ
別離の情にたへぬいろ

○

舟中讀元九詩

君が詩卷をともし火の
火影によめば詩つきて
天なほ明けずともし火と
消へつ明りつ殘りけり
眼の痛みたへがたく
燈火消してとこやみに
踞み居れば逆風の
浪吹きまきてふなばたを
打つこえといろ〳〵哉

○

贈江客

雨にさむけき柳かげ
霜に急なるかりのこえ

悲しかりけり君ひとり
やがては泊る川しりの
涙は芦邊に打よせて
月やのぞかんふねの窓

○

別草堂

我世をさけし三間の
いほりと山によりて立ち
泉一すじ潺湲と
いほり廻りて流るなり
山よ泉ようらむなよ
三とせの役目終りなば
やがてかへりてまた此處に
汝とむつみて世をや經ん

○

村夜

村のおちこち人絶えて
霜に枯れ伏す草かげに
聲あとれなるきりぐす
ひとり門邊に立出でゝ
野づら望めば照る月に
雪と見まがふ蕎麥の花

○

王昭君

御國の使かへるとや
いざ言よせん『黄金もて
何日か此身を贖け給ふ
大君もしも問ひまさば
告な給ひぞわが顔の
いたくな色のふりにしと』

○

秋思

山の端に照る夕ばえの
色は焼くより紅に
すみわたりたる大空は
藍にもまして碧なり
雲の形はさま〳〵の
獣伏すあり走るあり
三日の月と銀箭を
番ひてしぼる弓の影
天の戸渡るかりがねの
思ふかに河こえて
愁打ちそふ遠ぎぬた
秋あはれなる夕かな

○

琵琶行

客を送りて潯陽の
暮れ行く秋の江の畔
楓の紅葉やあしの花
水の琉璃照る夕あかり
主人馬より下り立ちて
客呻吟すふねのまど
互にあぐるさかづきの
憂とらさん管絃も
なくて悲しき別れ路や
江茫々と一輪の
月影くだき流るなり
川霧やぶりみなかみに
忽ち聞ゆ琵琶のこえ
主人かへるを忘れつゝ
客また解かぬともづなの
群をたよりに彈くものは
誰ぞと闇にうちさへば
琵琶の音たえて躊躇ひの
答なきこそもどかしき
船漕ぎ寄せて相のぞむ
姿にさけをくみそへて

燈火かゝげまた此處に
重ねて開く小ざかもり

千たび百たび呼び喚びて
始めて來つゝ來ながらも
琵琶かき抱きなほ袖に
面おほひて座に就きぬ

ねじ引じめて絃しらべ
するや僅かに音に立てゝ
曲をもなさぬ二三聲
聞くからそゞろ風情あり

掩へ抑へる絃のおと
思にしづむ歌のこえ
あぢきなき世を嘆つなる
愁の眉をしばめては
腕にまかせてかきならす
胸のうやむや限りなき

輕く擲めつもるくひき
なでゝはとらふ霓裳の
あとに六么かなでける
素破といふ間に板びさし
うつ白さめの大絃に

春の夜庭に誰が立ちて
私語く小絃まじえてと
天に擽ぐる玉ばんに
大珠小珠のおつるかな

花の梢を飛びかひて
聲滑らかにうぐひすの
鳴くかと見れば溪河の
石に咽びて流れ行く
水冷やかに氷てつきて
絃の音しばしたえにけり

しばし絃の音絶ゆる間を
切なるうらみ混々と
胸にや湧きて出づるらん
かくて思に身を焦がす
あはれ螢の聲もなき

忽ら破るしろかねの
水瓶をほどばしり
鐵騎馳突すしものあさ
劔戟空に鳴り渡る

曲を終りて撥をとり
胸に向ってかきければ
一聲たかき四のいと

帛引さきしひゞきあり

ひんがしの船西のふね
いづれも感に打れけん
群も得たてぬ靜けさに
秋の夜更けて江の中に
月のみ白くさえにけり

沈吟しつゝ撥とりて
いとの間にさしはさみ
衣紋つくろひしとやかに
容正していへるやう

『妾ももとは京城に
生れて家は蝦蟇陵の
ほとりに住ひ十三の
春より琵琶を學びしが
名は教坊の隨一と
人に推さるゝ譽あり
脂粉凝らせば人毎に
嫉まぬものもあらずして
傲奢をきそふ年少の
あらそひ贈る纏頭は
一曲かなで終はるたび
紅絹數を知らざりき

撃節しては寶玉の
櫛鋏をくだきつゝ
酒溢れては燃えなんず
眞紅のもすそ汚すなり

笑ひ暮せし去年今年
また來ん年も變らじと
花よ紅葉となほざりに
過ぎ行くうちに弟は
出でゝ軍にしたがひつ
姉とこの世をすて給ふ

暮れては明くる年月に

花のかんばせ色褪せて
零落たりや門前に
繋く、鞍馬もまれなりき

寄る年涙にさそとれて
商人許りにとつぎしが
離別の情をかろんじて
利を重んずるあき人の
常とは云へどその人は
妾をすてゝすぐるころ
物買はんとて去りにけり

身は捨舟の楫をたえ

江口をひとりさまよへば
船をめぐりて明月の
影すさまじく、水寒し

更け行く夜半をまどろみて
むかしの春を夢見れば
涙の露にそでひぢて
から紅にしぼるなり』

われとや琵琶をきゝしより
嘆息やまでありけるが
この物がたり打聞きて
またもや深く嘆つか那

われも同じく天涯に
淪落し身の今此處に
相見ることの不思議なれ

去年帝都を辭してより
潯陽城に謫居して
うべ鄙なれば年あまり
絲竹の聲も耳にせず
病の床に臥ししばの
戸ぼそをめぐる篁に
聞くや明れば血に叫ぶ
山ほとゝぎす夜に入れば
腸たゆるさるのこえ

月の夕や花のあさ
あるひはひとり酒酌めば
山歌村笛ありとても
俗調いかで聞き得べき

今宵は君が琵琶の音に
仙樂聞きし心地して
耳もしばらく澄わたる
やよ今さらに一曲を
かなでよ我と君がため
琵琶行をしも作らなん

わが此の言に感じつゝ
言葉もなくてありけるが
やがて彈き出す絃の音
調もうたゝ急にして
前にいやます悲しさに
いづれも袖を絞りしが
中にも涙とゞめ得ぬ
江州司馬ぞあとれなる

○

和微之雨中花

天の眞宰さかさまに
生殺の柄や握るらん

無用のものに長くして
人に短かき生命かな

松上の鶴著下の龜
千年も生きて病なく
人はしばしの夢の世に
紅顏去りて白髮の
來るや彌生の花咲て
散りしく前にあめ風の
嫉うくるにさも似たり
月をわたりて菜は茂り
年經て枯れぬ草もあり

花のみひとり如何ぞや
三百餘日の一ねんに
咲き匂へるは幾日ぞ

桃李語らずうぐひすの
嬌喉かりて昊天に
訴へんとやひねもすを
梢のかげに啼きあかす

白氏の詩終

明治卅七年八月廿九日印刷
仝　卅七年九月　六　日發行

白氏の詩

著作權所有

定價十五錢

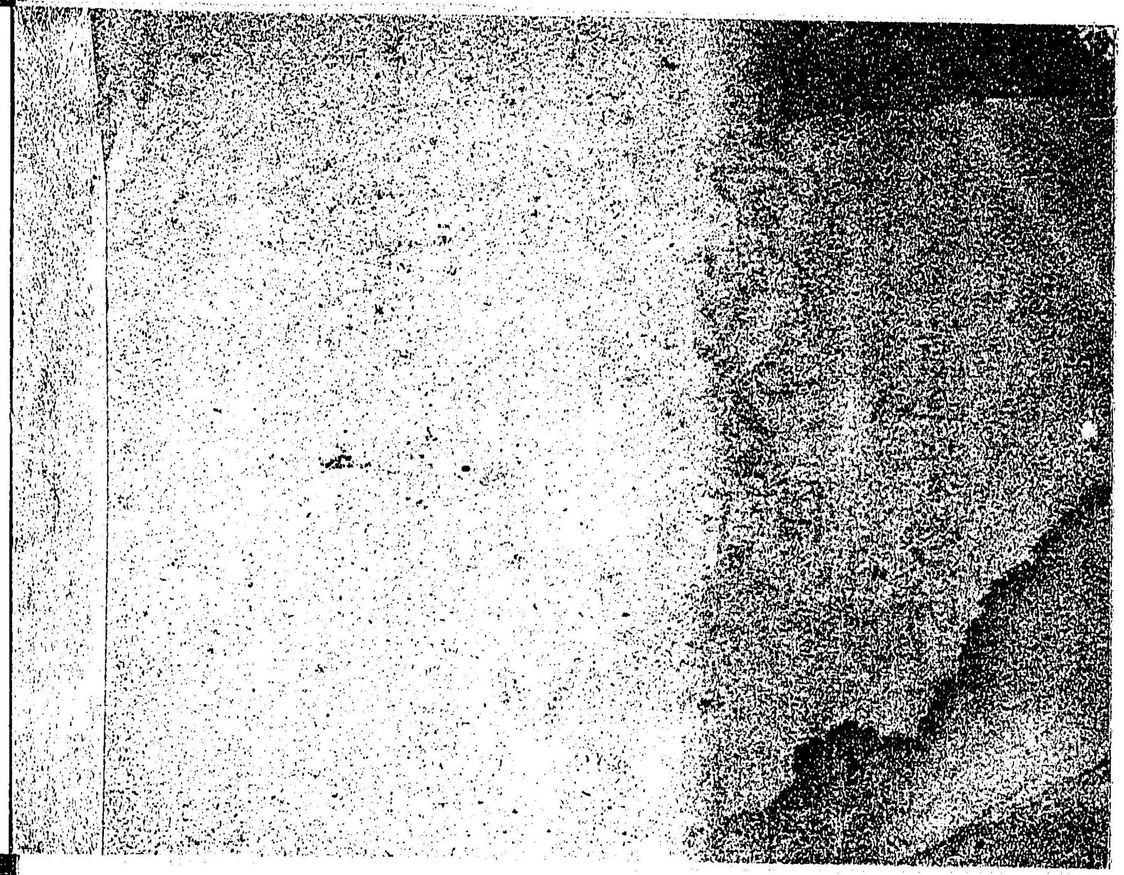
著作兼發行印刷者　東京市日本橋區通一丁目拾七番地　青木恒三郎

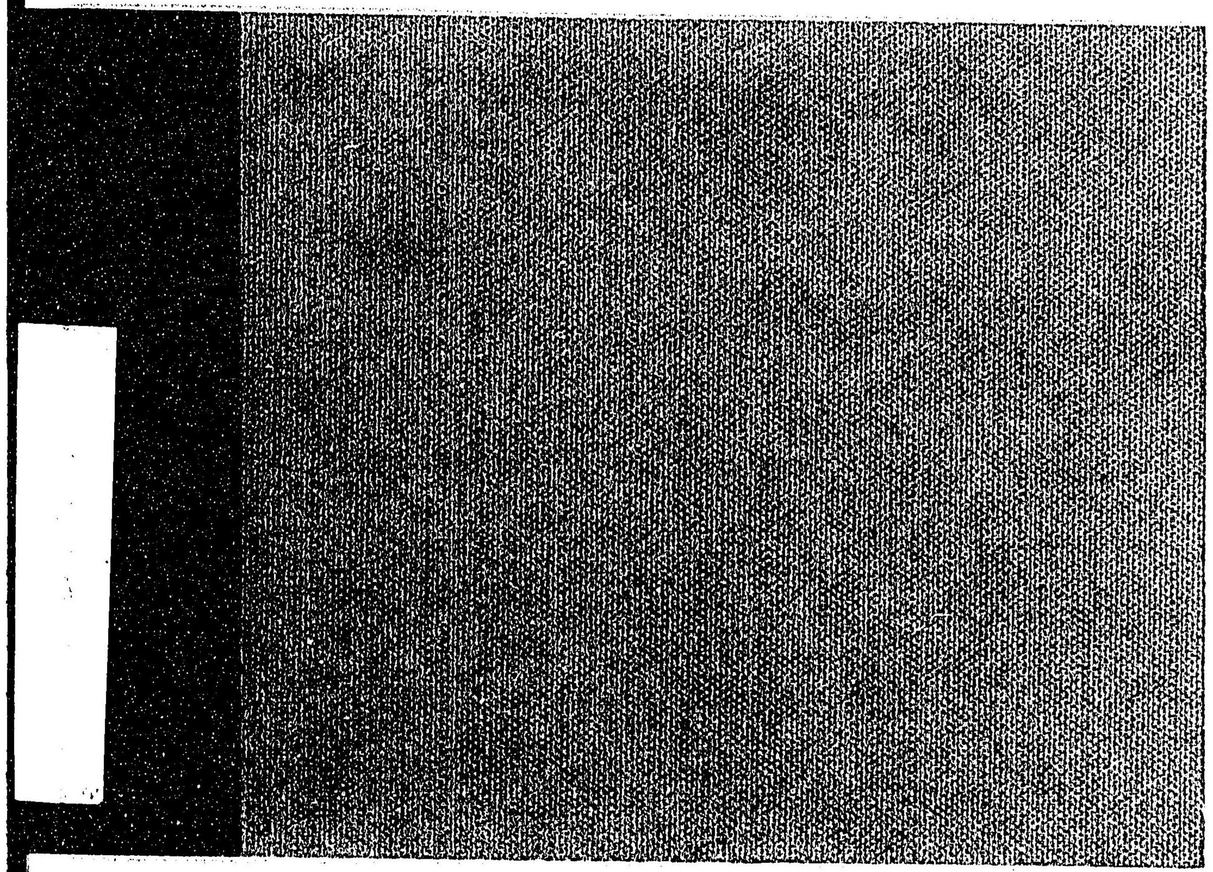
印刷所　大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷　萬山堂印刷部　電話西七八貳番

發行所　大阪東區心齋橋博勞町角　青木萬山堂　電話番東貳五〇番

發行所　東京日本橋區通一丁目角　青木萬山堂　電話番本局七八九番

賣捌所　伊勢四日市市堅町　萬山堂支店





白氏の詩

国立国会図書館

特53
757

088079-000-1

特53-757

白氏の詩

無名氏/著

M37

DBG-0176